民話「こんぶくろ池・名前のおこり」

ずっとずっと大昔のお話になりますが、そのころ田や畑で仕事をしていたお百姓さんたちは、のどがかわくと、この池のきれいな清水をのみにきていました。牧の馬たちも、木にさえずる小鳥たちも、野をかけまわる鹿や兎たちもこの池に集まって、それはそれは平和な風景を見せていました。

あるとき、畑に出ていた若ものが、手をついて腹ばいになり、池に顔をつけてむちゅうでのみました。そのとき、池の水が錦いろに輝いているのに気づきました。びっくりして顔をあげると、目の前に美しいこんぶくろ（巾着＝布で作った小袋）が浮かんでいました。

若ものは思わず手をのばしましたが、波にゆらゆら揺れているこんぶくろは、なかなかとれません。木の枝につかまって足をのばしたり、いろいろやっているうちに、こんぶくろは見えなくなってしまいました。若ものは、村に帰ってその話をしました。村の人たちは、「それはきっと米を生むふくろだんべ…。」「いや、それは子を生むふくろだんべ…。」と、つぎからつぎへ伝わってうわさ話に花が咲きました。それからは誰言うとなく、こんぶくろ池と呼ぶようになったということです。

（柏市教育委員会「柏のむかしばなし」抜粋　昭和60年発行）